

## △冷々亭杏雨▽から△四明▽まで

### ——一つの二葉亭四迷論——

寺 横 武 夫

△二葉亭四迷▽は、あらためて断わるまでもなく、一つの戯号である。その由来については、当人の真意がまだかでないだけに、若干の揣摩憶測が流布することになった。しかし、当の二葉亭は、明治三十五年のハルビンで、

二葉亭四迷の筆名の由来を訊ねると、「実は親爺が三文文士が大嫌いだね、貴様のような奴はくたばつてしまえと怒りましてね、まあ勘当同様です。くたばつてしまえ、そう親から言われると胸にぐさりと来ましてね、毎日この言葉を心の中で繰返しているうちに、くたばつてしまえが、ふたばていしめい、に交つたんですよ。」と笑った。

(石光眞清『曠野の花』昭33・7、303ペ)

と語っていた形跡がある一方で、「浮雲」執筆時代に感じていた自己の内心を分析し、

之は甚い進退維谷だ。實際的と理想的との衝突だ。で、そのデレンマを頭で解く事は出来ぬが、併し一方生活上の必要は益々迫つて来るので、よんどころなくも「浮雲」を作へて金を取らなまやならんことゝなつた。で、自分の理想からいへば、不埒なく人間となつて、錢を取りは取つたが、どうも自分ながら情ない、愛想の盡きた下らない人間だと熟々自覚する。そこで苦悶の極、自ら放つた聲が、くたばつて仕舞へ(二葉亭四迷)！

世間では私の號に就ていろいろ憶説を傳へてゐるが、實際は今云つた通りなんだ。いや、「仕舞へ！」と云つて命令した時には、全く仕舞ふ時節じまが有るだらうと思つたね。——その解決が附けば、まづそのライフだけは収まりが附くんだから。で、私の身にとると「くたばつて仕舞へ！」といふ事は、今でも有意味に響く。(「余が半生の懺悔」明41・6)

父の罵倒説と、自己検証からする自嘲説と二つあるわけだが、おそらく、後者の発言の方に信憑性があるのは、人の指摘するとおりであろう。あるいは、それは、清水茂1)氏が述べられるとおり、二葉亭が、「浮雲」にかけた青春の「野望ないしはダンディズムの象徴」(さらに、小説の主題上の意図の象徴)、と、「浮雲」を中絶作として放棄する作者の、「青春への悔恨、もしくは自嘲の記念」、を意味していると解すべきなのかも知れない。ところで、私がここで特立させて論じようと思うのは、△二葉亭四迷▽という戯号それ自体ではなくして、彼が、その前半生で用いていた、別号としての△冷々亭杏雨▽なる系統の筆名と、同時に注目される、後半生の△四明▽という筆名とでたどれる、別号の総体である。つまり、長谷川辰之助を貰いて、△二葉亭四迷▽という戯号がある一方に、しかし、それとは独立して、前半においては、△冷々亭杏雨▽系の別号が、後半にあって

は、△四明Vという別号がそれぞれ付着しているというかたちであって、これらの別号がえがく軌跡には、なかなか興味のある問題があり、そこに二葉亭を解く一つのかぎが秘められていることをも予知させられるのである。

例えば、こうした、前・後、二つの区分法によって、二葉亭の文学質を對象化する目途もなりたたくはなきそうで、それを四区分法（内田魯庵「二葉亭の一生」明42・8、柳田泉氏「余の思想史」解説」昭34・7）や三区分法（坂本浩氏「二葉亭四迷」昭16・3）などと対応させてみるのも、一つの興味ある問題である。

けれども、そうした予測を言うまえに、前期から後期に、なぜ別号の大きな変容が認められるかということが、これから追求していくべき重要な課題であるわけで、ここでは、トリヴィアルな事実から仮説を想定することで、二葉亭の側面を考察することにする。

ただ、私のめやすは総体的なかたちにおいてあるのだが（形式的な処理をうらつづける内在的要因と一体化させて論ずべきである。）、それについては、別途にゆだねたい。

注（一）「二葉亭四迷の人と作品」（『近代文学鑑賞講座』（第一巻）

82）

二

△二葉亭四迷Vの号を彼がはじめて用いたのは、よく知られているように、明治二十年六月に発表した『新浮雲』第一編においてであった。しかし、この号の登場のしかたは、今日から考えられるほどに堂々としたものでは

なく、いくらかためらいがちな登場のしかたであった。表紙や扉には「坪内雄藏著」があり、奥付の著者名にも「東京府民坪内雄藏」があるのみである。△二葉亭四迷Vの号が実質的に登場してくるのは、本文の内容においてであって、それも、「春のや主人合作」というかたちである。だが、作者による「浮雲はしがき」では、はっきり「二葉亭四迷」という署名に なっている。

こうした登場のしかた自体には、新人をうしろだてるための、一種の商業政策ふうの配慮が介在していたので、春のや主人・逍遙の手になる「浮雲第一篇序」文中では、「二葉亭の大人」と「四迷大人」ということばが、それぞれ二回ずつ用いられている。

とにかく、こうして△二葉亭四迷Vなる通り名が流布されていくわけであるが、この期の前後、△冷々亭杏雨V系とも称すべき、もう一つの別号も姿をみせていた事実には注目せざるをえない。

＊

まず、「浮雲」以前の段階では、以下のような雅号が今日残されている。その一つは、明治十九年四月十日発行の『中央學術雜誌』第二十六号に発表された処女論文「小説總論」におけるそれである。ここでは△冷々亭主人杏雨Vとある。

次いであらわれるのは、明治十九年四月の△冷々亭主人Vというもので、これは、『修羅鍛鐵場主』の巻末広告として発表されるだけで、出版はされなかった「ツルゲエネフ」父と子』（虚無黨氣質）春廻家聽助譯冷々亭杏雨譯豫告文」なる短文中の署名である。（表題中の△冷々亭杏雨Vと、本文末尾にある△冷々亭主人述Vと、一文中で異同はあるが、同一系列とみてよいだろう。）十九年五月十日、および六月二十五日の二回にわたって

発表した「カートコフ氏美術俗解」(「芸術の實際的意義」)では、「冷々亭主人譚」の署名がみえる。

いまひとつ、道遥訳の『泰西女蘭夫人傳』に、「女丈夫傳叙」なる小文を寄せた二葉亭は、その末尾で「明治丙戌初夏 冷々亭杏雨述」と記している。丙戌とは十九年の謂で、十九年夏の時点においてこの号を用いていたと見られるのである。(出版は同年十月)

「浮雲」発表のまえ、いまだ無名の青年・長谷川辰之助がおのれの文学的才気をこうして△冷々亭杏雨V系の雅号に託していたというわけだが、そのよってきたるゆえんのところはどのようなことであったか、いまは知るすべがない。しかしながら、先達道遥の筆名に対しては、

春のや先生の文の姿は、たとへば煙の外をてらす春の月の若さくらの下枝にかゝりたるがごとし。辭婉なれども麤に渉らず、意曲なれども整に至らず。夫の照もせず曇もはてぬとよみし古人の鼻歌もかゝる文の評となさばなしてん。されば名はおのづから體をあらはし招牌にかつて虚なし。先生の號をおぼろといふも良に以あることぞありける。

(中略) 若しその書をもてて世の金喰ひ虫となさば誠に面にくし、もて月をかけし若櫻の一枝をましたるとなさは至て難有し。(「女丈夫傳叙」)

あるいは、

お先眞闇三寶荒神さまと春のや先生を頼み奉り缺硯に隴の月の零を受けて墨摺流す空のきほひ夕立の雨の一しきり(「浮雲はしがき」) というような興味をみせてもいるわけである。もとより、正面きつての雅号解釈であるはずはないのだが、後者で、道遥から受けた助言に関して、「隴の月の零を受け(圈点引用者)」だとするいいまわしのあたりには、しゃれのめした戯作者流のダンディズムと並んで、あるいはもっと婉治な中国文人ふうの趣味さえただよっているのではなからうか。それはとにかく

く、道遥遊人、春のやおぼろ、隴月庵主人、などと称号している先達に対して、これらはいくぶん関心をいだいていた証左ではあるだろう。

そして、この十九年の夏といえは、「浮雲」の稿がかたちをなしてくる時点でもあるわけだ。このあたり、△冷々亭杏雨V系を用いながらも、一方で、△二葉亭四迷V系が準備されだしているというぐあいでもあろうか。

さて、「浮雲」の第一編(20年6月)に続いて、△二葉亭四迷Vは、第二編(21年2月)、第三編(22年7月7日~22年8月18日)でも用いられるが、道遥を凌駕してしたいに二葉亭の面目をあらわにしている。

第二編では、一編と異って奥付の著者名に、「東京府平民・坪内雄藏」のほか「東京府士族・長谷川辰之助」がみえ、第三編が発表される「都の花」の署名はすべて「二葉亭四迷」で統一されている。こうして、第一編

第二編の刊行によって、△二葉亭四迷Vの号が文壇に一つの地歩をきずいたのは、例えば、山田美妙、大江逸(蘇峰)、石橋忍月などの評価をまつまでもなく、すでに人の知るところであり、同時にそれは、一生涯にわたっての通り名ともなるはずのものであった。

とはいふものの、さきの△冷々亭杏雨V系がまったく影を消すというのではない。以下、順次にいくつかを例示する。

○ 物書くことおほえてより二十年 筆ならしのためにとて屢々白紙を綴り合せたること有りたれどいつもながらの三日坊主末まで書きとほしたることは一度もなかりし

(中略) さてもうとましの我心やと書かぬ先からまづ愛想を盡かしてあきっぱいの杏雨冷々亭の南窓の下にしるす 干時 明治二十一年八月七日也 (「くち葉集 ひとかごめ」序・以下、圈点は引用者)

○ 「四迷生汝。へに大なる疵有り」の書きし小説「浮雲には△無學△愚にして△答△學者ふらんと△する癖△せし痕迹有り甚だみにくし、(後略)

友人冷々亭主人述

(「くち葉集 ひとかごめ」)

○ 人生二十になればそれ／＼自活の道を求むべきものなるを(中略)いかて此まゝに老朽へまこと心を振りおこして今茲に社を結び月々文題を課して各々おもひ／＼に作りそをもちつとひ、かたみによしあしをあげつらひなとして作文の業をすゝめんとす(中略)かくいふはその心えなき一人なる長谷川の辰之介

(「落葉のはきよせ 二籠め」中、「冷雲社設立旨意書」)

○ 一、吾輩三名を以て社を結び毎月一回集會し雜誌一冊を編輯すへき事(後略)

(同、冷雲社申合の條々)

○ 客冷雲に問ふて曰く嗜好に標準有りや(後略)

(同、「嗜好論」)

○ 酒乎酒乎(中略)嗚呼天下能飲酒者、只吾一人、冷雲居、士識

(同、「題酒博」)

○ 古稱文以載道 然則作文將傳道也耳(後略)

(同、「冷雲文稿跋」)

このなかで、後半に統出する「冷雲」も、「冷々亭杏雨」系に接続する類と考えてよいだろうか。これらはすべて、二十一年八月七日から始まる「くち葉集 ひとかごめ」と、「明治二十二年六月二十四日」(「落葉のはきよせ 二籠め」)付日記とのあいだに散在する資料だから、ほぼ「浮雲」中絶の寸前と考えてよい。

なお、この期のものとしては、ほかに、「明治某年月日 日本書生長 某敬識」(「落葉のはきよせ 二籠め」中の「題虞氏寫真」)という、本

名を思わせるもののほか、「誠心堂記」(「ひとかごめ」)、「綱亭」(「ひとかごめ」)、「浮雲」の「第三篇筋立」メモの末尾にあるもので、原色写真版による。(4)などが散見できるが、後考にまつ。

米

ただ、右に列記した資料のうちで、注意しておきたいことの一つは、はじめから二つめ、「四迷」で「冷々亭主人」が並存する記述についてである。

〔四迷生汝。へに大なる疵有り〕の書きし小説「浮雲には無學」愚にして「智」學者ふらんと「せし痕迹有り甚だみにくし、初篇はいふに足らず、二篇はあとけなし三篇はいやみなり智者は智者ふらず智者ふるは愚人に限る智者ふらぬ所か知なるを知らぬからなり強ひて智者ふらんとせぬ所に大智有りてこもる、之を知らぬか知るとも行ひ得ざる乎、知らぬは知れて知れば力めよ 友人冷々亭主人述

「くち葉集」も後半に至るあたりには「浮雲」第三編の、主として第三回よりはじめて第二十二、三回に至る、さまざまの構想メモが用意されている。原本の原色写真版に徴してこれを見ると、抹消部あり、朱注部あり、で、文字どおりの悪戦苦闘のドキュメントをほうふつさせるものがある。清水茂氏が仮りに名づけられた呼称にしたがえば、この並存記述部分は、そのB種とC種の間、突如「狂氣したやうに」(7)はさみこまれてい

る。冒頭「四迷生汝」は、原本によると、抹消されている。「四迷生汝」と、ひとたびは墨太く書かれたこの文字が、消されてもおお毒々しいばかりの

生命力をもって、みるものの眼を射るほどである。△四迷Vと署名されたその戯号が、次いで急いで「汝」と対象化されなければならぬ宿命になったのだ。この覚書ふうのメモを記している二葉亭は、それを消し殺したうえで、最後には、「友人冷々亭主人」と書かざるをえなかったのだろう。しかし、「友人」とつきはなして距離をたもってみたところで、そうした処理に△四迷Vの生理が寸法を合わせただろうか。この二律背反、この「進退維谷」(「余が半生の懺悔」明41・6)は、ここにおおうべくもない。はきすてるようににががしい「ヂレンマ」を、ひとはなんと呼ぶのだろうか。便宜、道遥に登場してもらえば、一言で説明する。

種々の烈しい煩悶を體驗して、時としては自殺とまで思ひ迫つたこともあつた。さういふ場合にすら、とかく自己批判癖が付き纏つて、

不思議に二三分の遊離氣分を失ふことが出来ず、知らず／＼自己を客觀的に觀照し、とかく純粹な、眞剣な悲觀氣分にはなれないことが多  
い…… (「二葉亭の事」の「二葉亭の表現修業」、『柿の蒂』

22ペ)

おそらく、ここで許される唯一の仮想は、次のようなものではあるまいか。

△二葉亭四迷V系と△冷々亭杏雨V系の二律背反が導いていく彼の未来には、ただ文字放棄ということ以外にはなにごとくなかつたであろうと。

「浮雲」の第二編が発行されたのは、二十二年七月七日から八月十八日のあいだであつて、さきの覚書が書かれたのも、その時点をくだることはなかつたのだからである。

注(1) この第一編初版本には、異本があり、そこでは「合作」ではなく、「合著」とある。

(2) 道遥の回想では、「起稿は十九年夏ごろ」(「二葉亭の事」

昭7・7・25『柿の蒂』24ペ)、未定稿をはじめて見たのは、「多分、明治二十年の一月ごろ」(同24ペ)とも、「十九年夏か秋の頃」(同63ペ)とも言っている。

(3) 「」内は、岩波九冊本全集で、抹消部をおこした部分。

△内は、同じく抹消部を原本の原色写真版にしたがって、私におこした部分。

(4) 内田魯庵は、「其時分」(注、「小説総論」前後。)二葉亭は

冷々亭杏雨、率性堂、翁々亭等の號を稱してゐた。」(「二葉亭の一生」明42・8)、「其時分二葉亭は冷々亭杏雨、率性堂又は翁々亭と稱してゐた。」(「二葉亭四迷の一生」大14・1)と記しているが、この、△率性堂V、△翁々亭Vについての詳細は不明。

(5) 現存の「浮雲」は、第十九回において中絶されている。

(6) 清水茂氏「浮雲」(同氏編『近代文学鑑賞講座』1、二葉亭四迷)所収、133ペ〜136ペ)

(7) 中村光夫氏「二葉亭四迷伝」(講談社版、113ペ)。なお、氏は、同じ箇所を引用し、「『四迷生女の書きし小説浮雲には愚にして学者ぶらんとせし痕迹有り、甚だみにくし。初篇はいふに足らず、二篇はあどけなし、三篇はいやみなり、智者は智者ならず、智者ぶるは愚人に限る。智者ぶらぬ所が智なるを知るも憐くて、たいおもひくづをわけてのみ目をくらす。まことにはかなき事にこそあれ、(落葉のはきませ、二籠め)」(伝、113ペ 圈点引用者)とされているが、この引用には疑義がある。すなわち、氏が引用されている前半部分は、「くら葉集 ひとかごめ」(岩波九冊本全集36ペ)のものであり、圈点を付した後半部分は、氏も注しておられる「落葉のはきませ 二籠め」(同96

べ)である。

### 三

こうした筆名のありようが、二葉亭の後半生のある時期、三十七、八、九年の三年間あたりで、一つの、かなり重要と思われる転調を呈する事実には注目せざるをえない。その転調は突然あらわれるのではなく、前兆を見せて漸次変貌をとげだすというぐあいである。まず、ロシア文学の翻訳にあたって、一種語呂あわせを楽しむような、戯作的臭味の筆名を試みる階程があり、次の階程にいたって新たな別号使用にふみきるのであった。

### ＊

最初のきざしは、明治三十七年七月においてあらわれてくるが、それは「新小説」に訳載する、ガルシンの「四日間」の筆名を八刈心Vとしていくことである。これについて、二葉亭はのちに、「私が曾て<sup>カルシ</sup>心と署名して四日間といふガルシンのスケッチを反譯して新小説に出したことがあるが、」(「エスペラントの話」明39・10)と回想しているので、ガルシンのあて字であることは疑いえない。

ガルシンの作品は、このあとでも二度にわたって訳出しており、その訳者名も、それぞれ八刈心Vとなっている。二度のうちの一つは、三十八年一月に発表された「露助の妻」(「新小説」)におけるものであり、いま一つは、三十九年二月五日の「根無し草」(「東京朝日新聞」月曜文壇)のものである。(ただ、後者では八刈心Vとなっているが、八刈心Vと同系統と見ておく。)つまり、ガルシンの語呂によって八刈心Vを試みる階程が、三十七年から始めて、三十八、九年のところで、都合三回あること

になる。

こうした傾向の訳出署名は、三十八年一月の八鶴翁V(ツルゲエネフ「わからずや」38・1「文藝界」)にもうかがうことができる。これについて、朝日版全集第四巻の「凡例」(「大正二年七月十六日づけの文章」)に、

喜劇「わからずや」は鶴翁の匿名の下に雑誌「文藝界」に於て發表されしものなるが、故人深く之を秘したるが故に親朋も猶ほ之を知らず、世間亦之を閑却して讀みたるもの甚だ稀也。幸ひに西本波太氏が故人の談餘偶然洩らしたるを記憶し、搜索して之を全集に収むるを得たり。一端公けにされたものなれども頗る珍とするに足る。按ずるに此一編創作乎翻案乎之を知らず。故人曾てガルシンを譯したる時刈心の匿名を用ひたる例に由て推し、或はツルゲエネフの翻案ならん乎を想像せられるとも追て精しく考ふべし。

と疑義を出しているが、これがツルゲエネフのЗАБІРАКУ ПЕДИНТЕ/Яの翻案である(九冊本岩波全集)ことは現在明らかである。このツルゲエネフという人名に対して、二葉亭はかつて「杜ルゲエネフ翁」(2)という表記をあてたこともある。

あらためて断わるまでもなく、二葉亭たちが異国の文章を訳出していた当時、哲学は言うにおよばず、あらゆる文化概念の訳語が、いまだその安定した日本語を獲得してはいなかった。西岡、井上圓了、井上哲次郎、中江兆民、加藤弘之、福沢諭吉などが、さまざまの分野で訳語の定着に苦心しなければならなかったのであった。それは、二葉亭にあっては例外ではないだろう。その委細を追うことはまた別途にゆだねて、さしずめは八刈心V八鶴翁Vが用いられる三十年代の、二葉亭における基本的な用語傾向だけに目を向けておく。

例えば、二葉亭が用いる地名を見ると、亜細亜、阿弗利加、西班牙、

巴里、倫敦、露西亜、西比利亜、猶太、伯林などはともかく  
いくらか特殊な地名でも、「瑞西」(「露西亞の婦人界」  
明37・3)、「哈爾賓」(「哈爾濱通信」37・10)、「波羅的」(「滿洲  
實業案内」37・10)、「芬蘭」(「露國革命黨」38・8)、「彼得堡」  
(「昨今のウキッテ」38・11)、「墨西哥」(「エスペラントの話」39・  
10)、「波蘭」(「エスペラント講義」39・9、10)、「浦潮斯德」(「同  
義」19年以前)、「小説總論」19・4」という用法があり、「徠子徽」  
(「崩れ岸二冊目第一章反譯」くち葉集ひとかごめ所収)、「徠子期(徽)」  
(「くち葉集ひとかごめ)、「彼得帝」(「露西亞の婦人界」37・3)、「  
歴山二世」(同上)、「哥薩克」(「昨今のウキッテ」38・11)などを  
も例示することができる。

しかし、固有の異國語にそれなりのことばをあてているとしても、これは、  
当時の一般的状況とすることができ。たとえ、「苟くも外國文を翻訳し  
ようとするからには、必ずやその文調をも移さねばならぬ」「原文にコン  
マが三つ、ピリオドが一つあれば、訳文にも亦ピリオドが一つコンマが三  
つといふ風にして、原文の調子を移さうとした」「厳しく云へば、行住座  
臥、心身を原作者の儘にして、忠實に其の詩想を移す位でなければならぬ。  
是れ實に翻譯における根本的必要条件である。」(以上「余が翻譯の標準  
39・10)と主張していた二葉亭においても、こうした一般状況に歩調をあ  
わせるのがむしろ当然で、おそらく、このあたりのところに、ガルシンを  
△刈心▽に、ツルゲーネフを△鶴翁▽に移行してゆく、彼の基本的な姿勢  
を指摘できるのである。語呂あわせを楽しむだけのものと言え、殺伐に  
過ぎよう。ただ、一般状況に歩調をあわせながらも、こうしたものを訳出  
署名としてうち出していることには注目しなければならぬ。

＊

二葉亭がこうした別号を三十七年を上限に、三十八、九年において使用  
していることの裏面に、もう一つ、次のような、直接的原因が介在してい  
ることを認めておかねばならない。以下では、その事情について述べてみ  
よう。

日露の戦いが本格化する明治三十七年三月四日、二葉亭は、内藤湖南を  
介して大阪朝日新聞の東京駐在員になる。そこでは、

職掌は新聞の編輯事務には關係なく、専ら露國の事情やら滿韓經營  
問題などを研究調査するに在りて、實地に經營する手腕を缺ぐ小生に  
は、寧ろ此方が適任かも知れず候間當分はこれに満足して、滿洲旅行  
中切に感じたる普通智識の培養に力めながら、兼て理想の東亞經營問  
題に全幅の精力を傾注してみる考に候。(山下芳太郎あて書簡、37・  
3(日不明))

とある一方に、

仕事は東亞經營問題の研究と申事ゆゑまつハ會心の仕事ト申すべく  
且つ只今の反譯の仕事も實は必要に迫られて執筆いたしをるのみにて  
感興といふものは少しも乗り來らず此分にてハ到底文學者として世を  
渡る見込立ち不申候ゆゑ若し内職勝手次第にて又内職するだけの餘裕  
さへ与へ呉れれば八拾圓位にて我慢せんと存候 内藤へハ右内職の件  
には問合せの書面を出し置申候(遺書、37・1・2月ころ(遺  
書推定))

といった、翻訳への志向性もわだかまっていたので、こうした混濁があつ  
たために、朝日における二葉亭の行動は必ずしも意にみたないものへと流  
されざるをえなかつたのである。つまり、事情は、朝日がわと二葉亭がわ  
との、意志の疎通を欠く、ということにかかわるものであつた。

朝日は、このとき、

露西亞の新聞雜誌を閱讀して其頃の讀者がインテレストを持つ様な記事論説が有ればそれを譯して大阪朝日に載せるといふ役を執つた(中略)言はゞ翻譯擔任記者として入社した譯で有る。(池辺吉太郎「二葉亭主人と朝日新聞」、坪内逍遙・内田魯庵編『二葉亭四迷』上ノ166)

という希望を二葉亭に与えていたようである(また、本務に支障がない限り、内職の翻訳も差支えないということであつたらしい)、それに対して、二葉亭がわでは、一介の「翻訳担任記者」は本意とするところではなく、

樺太の地理沿革から、露國の政治施設の現状から、海陸の産物や如何やら彼やら有つて殊に産物が精しく山の立木の種類まで六個數い名をおそろしく多く列記して有つた様でした。一部の著述とまで行くまいが一冊の取調書であつて、どうしても新聞社へ持つて来るよりも參謀本部か外務省へ持つて往けと言ひたくなる様なものであつた。(池辺、前掲書)

右の例話で代表されるような活動をみせていた。そして、西田長寿氏に従えば、記者としての調査が綿密に過ぎたものであること、外国新聞の入手事情からいって、朝日に記載するまでには時間的距離が大き過ぎたこと、さらに、我國にとって日露戦争は無理かつ困難な戦争であることを主張せんとする二葉亭の意図と、時流とではそこに齟齬が認められること、などによつて、二葉亭の仕事の多くは没書の運命になつた。こうして、兩者の矛盾した事情が、記者としての進退問題にまで波及しなければならなかつたのは、三十八年の春である。

この時点において、二葉亭の心内には、「内職」の翻訳に関して、一種の手びかえ、ないしは遠慮、といったふうの配慮が働いたのではあるまいか、少くとも、そう考えるのが自然なみかたであろう、と私には思われる

のである。これを「正直」(「予が半生の懺悔」明41・6)に對する、彼の韜晦と呼んでもよい。

今日となりて考ふれば朝日社の今度の破綻は所詮勤める所をつとめずして太陽なんとに名を曝したるが一大原因と存候かゝる場合に又候春陽堂の物に名か出ては折角の池邊(注、吉太郎三山)の取做しも其効なく一も二もなく出て行けといはるゝは火を觀るよりも明かに候此點より考へても春陽堂へは氣の毒ながら此處當分猶豫して貰ひ度候(逍遙あて書簡、38・3月ころ(逍遙推定))

ここで言う「太陽」とに名を曝したる」とは、三十八年二月より三月にわたつて「太陽」に記載した、ゴリキイの一猶太人の浮世(うきよ)を意味する。署名は、A四迷Vであつた。

＊

私はいくらか迂路を経すぎたようだが、大陸漫遊から帰朝した二葉亭が三十七、八、九年という、彼の後半生の時点において、いくらかのたゆたいを見せつつも、新しい戲号におのれを託しながら韜晦の姿勢を見せていたことを指摘するにとどめて、次の課題に移らなければならない。

注(1) 岩波版八卷全集付録「二葉亭研究」

第四号に「露助の妻」は、舊全集(注、朝日版全集)には作者ガルシンとしてありますが、これはガルシン全集にはかゝる作品はなく、且つ作風もガルシンと異なりますので、ガルシンがこの作品の作者でない事だけは、はっきりしてゐます。舊全集の編輯者が、何故これをガルシンとしたかと言ひますと、「対心」(註、カルシンと讀める)といふ名で二葉亭といふ名を用



るず發表してゐるから斯く斷じたものと思はれます。しかししては誰が作者であるかと調べると、遂にこれを斷念せざるを得ませんでした」と誌されている。(九冊本全集解説による。)また、本文のはしがきでも、「翻譯にあらず、さりとて創作にもあらぬ一種の和合物」と記されている。

(2) 明19・4「ツルゲーネフ」父と子

(虚無黨氣質) 春廼家龍助譯冷々亭杏雨譯豫告文

(3) 西田長寿氏「二葉亭と朝日新聞」(「解釈と鑑賞」昭38・5)

(4) 「君の新聞紙上の働き振りは餘り世間には稱讃されなかつた。かくて戦争中経過した。君は其間常に不愉快らしく見えた。多

分さういふ風で新聞社の厄介になつて居るのを心苦しく思つたのであらう。(池辺吉太郎「朝日新聞に於ける長谷川君」坪内逍

遙「二葉亭四迷」所収。)

(5) なお、朝日がわにも、同趣旨の資料がある。「いまのやうに

『大阪朝日』に送つてくる原稿は悉く外務省か参謀本部の資料

めいたものばかりで、かたはら『太陽』『新小説』『文藝界』

等には二葉亭の文学にふさはしい作品が堂々と出ているよう

は、非職問題の余燼がのこる大阪の編集局での非難もよんど

ろなしと見るし、総務局の黜陟の公正をとかやくいわれても仕

方がない。」(『上野理一伝』昭34・12 前掲西田氏論

文より転写。)

#### 四

二葉亭が、三十九年二月五日の「東京朝日新聞」(月曜文壇)に、八苺心Vの筆名で「根無し草」(ガルシン)を訳出したことはすでにふれたと

ころである。その同じ「月曜文壇」を舞台に、彼は、以下、

39・2・26 「小按摩」(小品)

39・3・26 「老の線言」(評論)

39・4・23 「灰色人」(ゴリーキイ O Ce Poemの翻訳)

39・6・25 「はまらがへ」

と、四回にわたる、ほぼ一カ月おきの文章を發表している。ここで私が特立しておきたいことは、これらの筆名がすべて八四明Vという、新たに登場した筆名であるという点である。それほど目立った存在ではないのでともすると看過されやすいにしても、この期の二葉亭を考えるにあたって、これは、なかなか興味をそそる筆名ではあるのだ。

#### 米

朝日に入った二葉亭の仕事が多く没書になったのは、さきにもふれたように、一つの事実であるが、發表されたものがたださきの八四明V署名の四編にとどまるわけではけつてなかつた。それ以外のもので朝日に發表されたものは多くあり、むしろ、それらは、数において八四明V筆名をはるかにうまわる状況にある。

37・8・22 「摩天嶺の逆襲」訳載

37・8・25、29 「岫巖の役(六月八日敵方従軍記)」訳載

37・10・22 「哈爾濱通信」訳載

11・1

37・11・21 「歐露鐵道輸送力の大減殺」訳載

38・1・16 「滿洲實業案内」(十三回)

2・15

38・2・22 「必々親展(クロパトキンの評判)」

38・6・18 「結局如何」(十回)

7・8

米 38・7・24、26

「樺太の森林」

38・7・31、

「樺太の森林」

8・3

米 38・7・29、30

「樺太の岩礦」

38・8・2

「樺太の岩礦」

米 38・8・1、2、4 「露國革命黨」

米 38・10・5、7 「ひとりごと」

米 38・11・19、21 「昨今のウキッテ」

米 38・12・8、12 「其後のウキッテ」

米 38・12・25 「某政治家の『かぐや姫』評」

(米印が、「東京朝日新聞」、その他は、「大阪朝日新聞」を示す。)

はじめに述べた、三十九年代の△四明▽署名のものを四編発表する以前のところで、二葉亭は、右に列記しただけのものを朝日に発表している。

けつして多産というではないが、かなりの編数を発表しているわけである。

ただ、総体的に発表回数のみならずが目立つので、とくに、入社した三十七年代と、それに続く翌年の三十八年代春さきまでのところでは、発表量が

いくぶん少ない感じである。

実は、この、発表量が少ないあたりのところで、朝日との悶着が生じていたのだった。三十八年二月、三月のころには、大阪朝日の上野社長が、

二葉亭の進退問題に関する大阪がわの意向を、東京朝日の池辺主筆を介して二葉亭へ伝達した依頼している。そして、二葉亭のがわでも退社の決意

をいくらか考えたふしがある。また、この時期の、とくに三十七年度の発表

表が少ないのは、前にもふれた没書事件にかかわるので、西田氏の考証に

よると、二葉亭の書いた十三編の原稿のうち、発表をみたのは前記四編に

過ぎなかつたという状況である。(2)

米

△四明▽の別号は、また、書簡にもあらわれる。書簡にあらわれる△四明▽の特徴は、三十八年春から翌三十九年秋にかけての、兩年のみに集中していること(これは、△刈心▽△鶴翁▽や、朝日「月曜文壇」における△四明▽使用の時期と呼応している。)、差し出す相手が、とくに昵懇な坪内雄藏(道遥)・内田貢(魯庵)という特定人に限られていること、である。それらを列挙すると、以下の十通にみられる。

- 一六四 明38・3(?) (道遥推定) 道遥あて
  - 一六五 明38・3頃 (道遥推定) 道遥あて
  - 一八七 明38・7・4 道遥あて
  - 一八八 明38・7・15 魯庵あて
  - 一九一 明38・7・25 道遥あて
  - 一九三 明38頃(道遥推定) 道遥あて
  - 二〇五 明38・8以後(道遥推定) 道遥あて
  - 二二五 明39・8・7 魯庵あて
  - 二二七 明39・9・10 魯庵あて
  - 二二三 明39・9(推定、封なし) 魯庵あて
- (注、上段の数字は、岩波九冊本全集の書簡番号を示す。)

一般的に、書簡の場合は、雅号を用いるよりも本名を使用するのが自然であろう、という推定がつく。事実、二葉亭の全書簡(書簡の草稿類を含めて、約三五七通)に徴して見ても、雅号を使用する頻度はきわめて少なく、△四迷▽を使用するのが六回数えられるだけである(例外として、「二葉亭事長谷川辰之助」が一回ある)。あとはすべて、実名の△長谷川辰之助▽系を用いており、それも、差した相手の、待遇の度合に応じて、

フルネーム、△長谷川▽、△辰之助▽などを自在な使用差で用いている。こうした状況のなかで、△四明▽が十回を数えるという事実は、いたって興味のある、特筆すべき現象であろう。

ところで、私はここで、錯雑した個々の事実に深入りしすぎたはならないのだが、書簡を用いて対象化する場合は、自己限定、ないしは自戒について再認識しておきたい。その一つは、現在公表されている彼の全書簡といえども、実際に書いたはずの実量から見れば、不完全な資料に過ぎないこと、また、ここであつかわれるのは、とくに封書の場合、封筒の署名とは別の、書簡本文中における署名だけであること、の二点である。

しかしながら、それらのことをいちおうふまえたうえでも、二葉亭のこの△四明▽使用の状況は、総体的にみて、たしかにきわだった現象と言うことができるのである。

＊

以上の叙述によって、この期の二葉亭が△四明▽なる筆名を別号として用いていたことの基本状況はほぼ明瞭になったと言ってよいだろう。それは、まことにきわだった特徴をもつ現象であったわけだが、これにかかわるいくつかの問題をここで考えておくことにしたい。

朝日新聞社での、文学的な文筆活動において△四明▽を用いていたことと並んで、道遥・魯庵あて書簡に限って△四明▽を使用していたこと、しかも、それらの使用時間が三十八、九年の一時期にだけ集中していたこと、背景には、明らかに朝日とのゆまぢがいの問題が介在していたと思われる。そこには、彼の、筆名に対する気持ちのたゆたいがあり、△二葉亭四迷▽によって人口に膾炙している自己を韜晦させる必要性を感じていた。こうした錯綜した気持ちのまま第一階程では△刈心▽△鶴翁▽の別号を用いさせ、次いで、その延長線上に、△四明▽という、もう一つの別号を生

じさせる一必然性があつた、ということになるだろう。くりかえし述べたように、△四明▽があらわれる時期は、△刈心▽△鶴翁▽の出現とごますを接しており、その次に続出する△四明▽は、朝日と書簡で述べて上の呼称があるのである。

また、道遥と魯庵あてに△四明▽が集中している背景には、二葉亭の心内にわだかまっていた、ある種の秘めごとが、懇意の相手を得ることによって、はからずも顕現したというけしきが見えないではない。

二葉亭の全書簡を総体的に検索すると、とくにこの二人に対しては、ほかに比すことができないくらい、多量の書簡を送っている。つまり、二人が、二葉亭にとって終生変わることのない親友であつたことは、書簡の統計からだけでも推定しうるところなのだが、別して、道遥は肉親以上の友人であつた。

坪内道遥あて 無署名(8)

長谷川辰之助(4)

△長谷川(32)

辰之助(20)

四明(6)

内田魯庵あて(無署名(31)(米16)

長谷川辰之助(6)(米5)

△長谷川(48)(米17)

辰之助(2)(米1)

四明(4)

(注、米印は、魯庵が、その訳書「復活」について、二葉亭に疑義をただした特別のもので、書簡という範ちゅうには必ずしも入らない。) 二人にあてた二葉亭の書簡を、署名上から分類すると、以上のようである。道遥あてのものは総計七〇通、魯庵あてのものは九一通を数える。し

かし、魯庵あてのものは、魯庵が、三十八年三月以降に、トルストイの「復活」を翻訳するに際して助言を求めたものの返書であるから、いちおう除外して数えると、五十二通に相当して、逍遙あてのものをしたまわる。また、例えば、△長谷川辰之助Vの、姓と名の使用法から見ると、△辰之助Vと、うちとけた用法は逍遙の方に多く、魯庵にはいくらか他人行儀の傾向があるものようである。<sup>(4)</sup>それはとにかく、△四明Vをこの二人に用いていることの裏がわには、思いなしか二葉亭の心内の、秘められた側面がひそんでいるようではある。

なお、このほかに、「其面影」の草稿の一つとみられる「その面影」(岩波九冊全集第8巻91頁)の署名に△四明Vが見られる<sup>(5)</sup>ほか、はやくは、「明治三十七年」と題される日記の表紙に、「排悶存稿、時事日記四明」と、△四明Vの筆名が見える。したがって、△四明V出現の上限は、いまのところ、いちおう、三十七年ということになる。

#### 注(1)

「從來は間違ひたらけにて未だ一度も心ゆくまゝに動きもせず 此儘退社せしめられ若くは自分より引退するは甚だ不本意なれば或は大阪より公然縁切り話の來ぬ内に此方より引決すへき場合かも知れねど希望をいへは今一二ヶ月猶豫してもらひ其間に實際役に立つか立たぬか試験して貰ひたし 小生も之を最期の決戦とおもひ心ゆくまで働きたる上に次第によれば大阪よりの指圖を待たず自分で去就を決すべし」(逍遙あて書簡 38・3(？)(逍遙推定))

#### (2)

氏は、『上野理一伝』によって、二葉亭の原稿を次の十三編数えておられる。(「二葉亭と朝日新聞」昭38・5) (1)米摩天嶺の逆襲 (2)米岫巖の役(六月八日敵方從軍記) (3)關東報の體裁 (4)關東報戰線 (5)縁山の防禦戰 (6)三扁岑占領戰

(7)得利寺激戰詳報 (8)旅順死守の訓論 (9)米吟爾資通信 (10)敵師の遼陽戰役頗未電奏 (11)遼陽戰役敵方公報 (12)郡司大尉遭難の敵報 (13)米歐羅巴鐵道輸送力の大減殺 (私注、米印は「朝日新聞」に発表のもの。)

(3) 三十八年四月から、新聞「日本」に連載。

(4) ちなみに、「辰之助」と署名するのは、妻・柳子あての21通に次いで、逍遙の20通が多い。「辰」とだけあるのは、逍遙が11通、柳子へ2通、魯庵へ2通。

(5) ただし、△四明Vの署名は、全集版には録されておらず、清水茂氏編『二葉亭四迷』(前掲)の原稿写真版に見える。

(6) 「早稲田大学 二葉亭四迷資料」(昭40・4、早稲田大学図書館紀要別冊1)によると、「表紙に、毛筆で右下に『四明』、中央に『排悶存稿』、左端に『時事日記』と記されている。」とある。なお、玉井乾介・栗田博之氏編『二葉亭四迷資料ノート』(「文學」昭29・10)参看。

また、この日記の表紙裏には「ますらをぞ」云々の歌がある。

#### 五

ところで、この小論中私にもっとも関心があるのは、彼が、なにゆえに△四明Vの筆名に一つの定着を得たのであるかということであり、あるいは、そもそもにおいて、なにゆえに△四明Vということばを選んだのであるか、ということである。これに納得がゆく示唆を与えることはいささか困難なのであって、例えば、唐の賀知章が△四明狂客Vと号したことはどのように二葉亭に接続していったのであるのか、あるいは、明の周之士が△四明居士Vと称し、元の陳秀民が△四明山道士Vと称したのにかかわる

のであるかないか、さらにはまた、二葉亭の愛した魏叔子（註）にちなむものであるのか、も判然とはしない。△四明山人入と称した江戸文人（石川丈山）が彼の読書範囲に存したということも、私はたしかめていない。

ただ、道遥の、「支那へ往つてからは、例の四明山（註）から思ひ附いて、「迷」を「明」に書き替へてゐた。一つは、余り名詮自称過ぎるのが氣になつて来た為でもあるらしかつた。」（「戯号の事」93頁、『柿の帯』所収）、あるいは、「晩年には、さすがに氣になつたと見え、殊に、北京時代には、四明山に因んで與、書簡などには、いつも四明と書き換へてゐた。」（「二葉亭の事」60頁、同所収）と述べているのが一つの手がかりめいたものをおしえてくれるのみである。だが、ここで「北京時代」と言うのは、現存する二葉亭の書簡中には見いだされないので、ことは、必ずしも容易ではない。

＊

△二葉亭四迷V系の筆名が長谷川辰之助の一生を貫いている一方で、しかし、それとは独立して、前半期においては、△冷々亭杏雨V系の別号が、後半にあつては△四明Vの号がそれぞれ付着してゐたという図式は、以上の叙述によつて、いちおう納得がゆく。その場合、△冷々亭杏雨V系の筆名は、△二葉亭四迷Vを誘発するための、一つの媒体として働いた感があるのだが、後半に統出する△四明Vは、△四迷Vとの連関において、どのような意味をなつていたのであろうか。

△四明Vを用いた二葉亭の心情は、直接的には、朝日への氣がねから身を縮めさせるためのものであつた、と考えられる。だが、要因としてはまだ一つ、もっと間接的に、もっと内部的なものとして、現状脱出をはかる二葉亭の願いがそれにこめられていたのではないか、と私は思うのである。以下は略筆に従わざるをえないのだが、それに関する基本的な私の推定を

記しておく。

二葉亭が△四明Vを用いるのは、ハルビン（三十五年）、ペキン（三十五年、六年）の大陸漫遊から帰朝したあとであつた。大陸歴訪は、いわば彼の青年時代からの宿題でもあつたのだが、實質的には、意に満たないものとして終らざるをえなかつた。そこでは、

君自身も二葉亭四迷の名を嫌ひ、幾度か二葉亭の名を換へんとした、特に北京より歸つた後、最も此の傾向多く、僕が二葉亭の虚名がなかつたら、どれだけ仕事が出来たか知れないといつてゐた。（横山源之助「真人長谷川辰之助」、『二葉亭四迷』上ノ一九八頁）

ということもあつた。また、帰朝後の、△四明V署名の書簡が、いずれも失意の時代を思わせるものであつて、文調は全体的に暗い。

だが、これらの書簡で注目されるのは、失意のなかで方向探索を試みつつも、大陸雄飛の願いとでも言えるものを切望していることである。それは、「満洲」であり、「朝鮮」であり、「支那」であり（以上、道遥あて書簡）、かつまた、「蒙古の空」（魯庵あて）ではあるが、概して、大陸への志向であることは変りはない。

する事爲す事皆へまばかなりて一つとしておもふやうにならず是に至つて肝癢か破裂せざるを得ず、弱いと云はれても薄志といはれても嫌なし、肝癢か起つて耐へされ不申候肝癢紛れといふ譯ならねど寧ろ又支那へても二三年飛び出したく成申候（後略）四明 道遙兄 大丈夫そわれますらをそ

め、しくも泣きてをあらむや  
わか世拙くも

是は實ハ號泣の聲也（明38年頃、道遥推定の書簡）

欄外に記されたこの歌は、さきに四節でふれた「明治三十七年」日記の表紙裏にも記されている。「號泣」する△四明Vは、またぞろ、「支那」

を志向しているのである。逍遙の言うように、△四明Vが、「四明山」の名にちなんでいるかどうかは別としても、広く大陸一般にあまかける、象徴的な△二葉亭四迷Vの夢であることは、ここで推定できるのではあるまいか。

夢は、現実のためされるとき、夢そのものの属性をはぎとられるのだがひとたび崩壊した大陸雄飛の夢が、現実とはいちおうかけはなれているにしても、いや、むしろそれゆえにこそ、夢そのものをゆめみることはゆるされるだろう。後半に続出する△四明Vは、そういうことを私たちに語りかけているようだが、こうした問題、あるいはそれをふまえての総体的な問題は、また次の課題である。

注(1) 明末清初(一六二四—一六八〇)の人。本名は檣、字は氷叔、江西省寧都出身。

(2) 浙江省寧波にある山。天台山とも言う。「四明之者、天台之委也」(三才図会、四明山図考)

(3) ペキンから逍遙にあてた書簡は、7通残されているものの、△四明Vの号は見えない。他あての、残りの4通にもそれはない。

(4) 前節の注(6) 参看。